勤・倹・譲への心田開発

――二宮尊徳の道徳教育理論――

大　貫　章
（報徳博物館評議員）

要旨

二宮尊徳の思想は報徳の思想である。尊徳は物や人に備わる良さ、取り柄、持ち味のことを徳と名づけた。そして、人間は自然や社会の多くの恩徳によって生かされているのだから、それらの徳に報いていくことが人倫の道である、と説いた。

報徳の実践は、具体的には勤・倹・譲によってなされる。勤とは、人間の生活に有用な財貨を産み出すこと、倹とは、その産出物の内から節度ある消費によって余財を産み出すこと、譲とは、その余財を自己の将来のために譲り残し、社会公共のために推し譲ることである。尊徳が推進した「仕法」と呼ばれる村おこしの事業は、勤倹譲を実践することによって成し遂げられた。

勤倹譲の反対は怠奢奪である。人の心はこちらに傾きやすい。これを勤倹譲のほうへ導くことを心田開発という。これは大変な難事業である。

尊徳はかなり正確な進化論を書き残しており、人類の誕生や倫理道徳観念の形成過程についても卓越した見解を表明している。怠奢奪は鳥獣の心であり、きわめて旺盛である。これに反して勤倹譲は古代の聖賢が樹立した人倫の道であり、微かにしか行なわれない。

だが、仕法推進を指導すべき立場の者は、昔の聖賢を見習って人倫の道を踏み行ない、人々の模範となるべきである。指導に当っては、指導者の心がまえが重要だが、指導の技術がないわけではない。現場主義・現物主義に則ったさまざまな指導方法があり、それらを通して人々の心田は開発され、やがて仕法の事業はみごとに完遂されていくのである。

目　次

一　報徳の実践「勤・倹・譲」
　（一）勤めれば得る、怠れば失う
　（二）勤めよや小子、倦むことなかれ
　（三）分度で倹を具体化する
　（四）奪うに益なく、譲るに益あり
二　勤・倹・譲への心田開発
三　一心が治まれば万心が治まる
四　微かな道心で危うい人心を戒める
五　さまざまな実地の教育・指導
　（一）書いた豆は馬は喰わない
　（二）教と養を兼ね行なう
　（三）教化とは身を以て導くこと
　（四）機会を捉えて教える
　（五）巧みな比喩で諭す
　（六）『大学』を道歌で料理する
　（七）『中庸』も噛み砕けば、こうなる
　（八）「芋コジ」による集団的な啓発

一　報徳の実践「勤・倹・譲」

江戸時代末期の荒廃した農村を復興・再生させるために二宮尊徳が創始した村おこしの事業の理論と方法は「報徳仕法」と呼ばれる。その要点について、尊徳の一番弟子で尊徳の伝記『報徳記』の著者である相馬藩士の富田高慶は、その『報徳記』の中で次のように述べている。

「私の方法は、節倹によって無駄な費えをはぶき、余財を産み出して、ひとの艱苦を救い、おのおの家業を勉励し、労苦を刻み、終身善を踏みおこなって悪業をせず、勤め働いて一家をまっとうするにある。家々がこのようになれば、貧村も必ず富ますことができ、廃亡の村里でも必ず復興再盛に至るのである」[1]

これをさらに要約すると、斎藤高行（尊徳の弟子、相馬藩士、富田高慶の甥に当たる）が書いた『報徳外記』[2]（第二十五章「報徳」）の中の「わが道は徳に報いるにある。徳に報いるとは何か。天地人三才（三つのはたらき）の徳に報いることである」という言葉になり、また、福住正兄の『二宮翁夜話』（以下『夜話』と略記）の「わが道は勤倹譲の三つにある」（『夜話』一二一（原書番号、続四三））という表現になるわけである[3]（なお、報徳という思想そのものの内容については、拙論「報徳における道徳と経済」（『モラロジー研究』五十二号）を参照されたい）。

つまり、報徳を具体的に実践することは、基本的には天地人三才の恩徳に報いるために勤・倹・譲の三つを実行することなのである。以下、この考え方を前提として、更に考察を進めていくこととしたい。

図1

(一) 勤めれば得る、怠れば失う

尊徳は次のような道歌を数多く詠んでいる。[4]

まけば生え植えれば育つ天地(あめつち)の
　あわれ恵みのかぎりなき世ぞ
天(あま)つ日の恵みつみおく無尽蔵
　鍬でほり出せ鎌でかりとれ

たしかに勤労こそが付加価値を産み出し、経済的な繁栄をもたらす源泉である。原始時代、人類

がまだ農耕というものを知らなかったころ、人々は天然の木の実や草などを食べて、わずかに飢えをしのいでいた。しかし、やがて知恵のある指導者が現れて、田や畑を作り、米や麦などを人工的に栽培する技術を考え出した。ここから人類の生活は飛躍的に豊かなものになった。そして、人類が農耕を初めて以来、人間の勤労は主として農耕に注がれることになった。このようにして、農耕こそが国を開いたのだ、と尊徳は次のように語っている。

「わが法で荒地を開発するには、一鍬一鍬起こし返す仕事を積んでゆくのである。一鍬ずつ、一反歩ずつの努力をたゆまず積んでいけば、全天下の荒地も開き尽くすことができる」(『二宮先生語録』二一)[5]

尊徳は、また、『三世観通悟道伝』という哲学的な著作の中で次のように述べている。

「得失発起すれば、年々歳々、勤むれば得、怠れば失うこと、止まず転ぜず(何かを手に入れたり失ったりすることの元を考えてみると、勤めれば得られるし、怠れば失うのであり、このことはいつでもどこでも間違いのないことである＝意訳)」[6]

そして、このような考え方を次のような教訓にまとめている。これは尊徳によって「貧富訓」と

名づけられ、広く朗唱されている。[7]

遊楽分外に進み
　勤苦分内に退けば
　　すなわち貧賤その中にあり

遊楽分内に退き
　勤苦分外に進めば
　　すなわち富貴その中にあり

尊徳の教訓に従って勤苦・勤労を実践した六百を越える村々は、みごとに再生して経済的な豊かさを取り戻したのである。「これこそが極楽浄土なのだ」と尊徳は次のように語っている。

「仏教家は極楽浄土を説いて、『地上には金銀が敷きつめてあるし、山には珠玉が積み重なっている。海はといえば、サンゴ、コハク、ルリ、シャコ、メノウがいっぱいある』（『阿弥陀経』）などという。人々はそれを聞いて、そういう所に生まれたいと願う。……今つくづく世の中を見渡すと、網を海の中に入れれば魚が得られ、田地を耕せば百穀が得られて、年々歳々尽きる

ことがない。これらは、皆、金銀珠玉に換えられるものであり、たとえ換えられなくても、実際の値打ちは金銀珠玉にまさるべきものである。実に我々の住む現世はこのとおり豊かなもので、これこそ真の極楽浄土ではないか。しかし勤めればそういう宝が得られるが勤めなければ得られない。よく勤めれば多く得られ、少く勤めれば少しだけ得られる。実に絶妙の理法というべきだ。なんとこの世は尊ぶべき極みではないか」（『語録』二二〇）

（二）勤めよや小子、倦むことなかれ

尊徳は「勤苦」とか「勤労」「勤耕」などという言葉も用いているが、最もひんぱんに使用しているのは「勤」（または「勤めよ」）という用語である。彼は次のような歌を詠んでいる。[注4参照]

身をつとめ分をおのおの譲りなば
　本かたまりて邦の安さよ
身をすててここを先途と勤むれば
　貧しきことも知らで年経ん

また、次のような文章を書き残している。[8]

勤メテ勤ムベシ身ヲ苦メテ財ヲ施セバ其ノ身其ノ身天命ヲ受ク（我が身を削って他人に財を推譲すれば、それなりの報いはある。＝意訳）

勤ムベキハ身ヲ苦メテ戝ヲ施シ其ノ家ヲ貧クシ以テ其ノ用ヲ約スレバ年ゴトニ其ノ分内ノ徳ヲ増ス（財を施し自分の家は貧しく暮らして費用を倹約すれば、結果として自分の家の財徳も増していく。＝意訳）

尊徳のいう「勤」とは、単に「労働」とか「働く」という意味だけではなく――それも含まれるが――むしろ、士・農・工・商などすべての人がそれぞれの持ち場に応じて自己の任務や職責を果たすべし、という意味なのである。

尊徳が制定した「報徳訓」（短文のもの）[注7参照]について、報徳博物館の佐々井典比古理事長は、詳細な解説を加えた上で、これを「かなほうとくくん」として要約しておられるが、その中で、「もちばもちばでつとめよう」という表現をしておられる。これこそが、尊徳のいう「勤」の内容を最も的確に言い表したものである。[9]

尊徳の時代は士・農・工・商という封建的な身分制度の時代であり、この重圧の下で尊徳は大変な苦闘を強いられたのだが、しかしながら、尊徳の意識の中では、士・農・工・商というものは、身分や階層のタテの秩序というよりは――むろん、そういう側面は重大ではあるが――むしろ、社会的経済的な分担と協力の関係なのであり、持ちつ持たれつの相互依存的なヨコの関係なのだ。

「農」は米や麦、野菜などを作り、「工」は道具や家具、着物などを作る。「商」はあちらからこちらへ、有るものと無いものとを通じ合わせる。山奥で海の魚が食べられるのも、海辺で山の材木が利用できるのも、商人たちのおかげである。

売り買いの二つの恵みなかりせば
いずくの果てに咲くやこの花

「士」は行政や司法、福祉などの大切な役目を果たす。彼は次のような歌を詠んでいるが、自身が小田原藩や幕府の行政官に任ぜられているので、自戒の気持ちがこめられているように思われる。

もろびとの苦楽の元を業（わざ）として
勤めつくさん幾代ふるとも

さて、尊徳は「勤めよ」という教訓をどのような対象に向かって説いているのだろうか。もちろん、士・農・工・商――および、儒者、書家、医師、数学者など、諸職[10]――のすべての人に向かって説いているのだが、中でも特に強く訴えかけているのは武士階級の人たちに対してである。というのも、尊徳の門に入って、その教えを受ける者の多くは、武士階級の人たちだからである。相馬藩

の富田高慶や斎藤高行を初め、下館藩の家老・衣笠兵太夫、烏山藩の家老・菅谷八郎右衛門、谷田部茂木藩（細川領）の中村玄順（初め藩医で後に用人職）など、皆、そうである。彼らは自分の領国に帰れば、報徳仕法の推進を指導すべき立場のリーダーたちである。尊徳の教訓の多くが、こうしたリーダーたちの職責や任務にかかわるものであることも、当然といえば当然である。

「衰廃を復興することは、聖賢の道であり、人君たるものの職責である。これがために身をささげ力を尽してその功をなしとげるのは、家老の任務である」（『報徳外記』二三章「全功（中）」）

「わが道は天子の任務、幕府の任務、諸侯の任務であって、もとより、職分の低い小役人の任務とするところではない。なぜならば、国を興こし、民を安んじ、天下を経営する道だからである」（『語録』二六）

「私が日夜説くことは、天下国家を治める道である。だから天下国家を憂うる心のない者がこれを聞けば、きっと苦しんで、一言聞くごとに重荷が加わるように感ずる。ところが天下国家を憂うる者がこれを聞けば、きっと喜んで、一言聞くごとに重荷をおろすように感ずる。まったく、この道は大人に説くべきもので、小人に説くべきものではない」（『語録』三〇）

そして、生涯の最期のとき、臨終の床に就いた尊徳は、日記の最後に次のように書き残して、弟子たちへの遺言としたのである。[11]

「勤めよや小子（おまえたち）、倦むことなかれ」

（三）分度で倹を具体化する

二宮尊徳は、自身の私生活については、生涯にわたって質素倹約、粗衣粗食を貫き通した。そうした生活態度のためか、彼は勤倹力行の見本のように思われ、そこから、ケチを奨励したように誤解しているムキもあるようだが、尊徳はけっしてケチを奨励したのではない。ケチと倹約とは次のような点で大きく異なる。

一つは目的・動機のちがいである。ケチは「自分のため」だが、尊徳の勧める倹約は「他人のため」である。もう一つは、その目的と密接に関連しているのだが、経済的な「分度」――収入に応じた支出の限度――を設定することが尊徳のいう倹約の前提になっていることである。そして、その分度に基ずいて計画的な支出を行なうことによって余剰を生み出し、その余剰を他人のために推し譲ることが尊徳の勧める倹約なのである。尊徳は次のように語っている。

「世間の人はケチ（吝嗇）な者を見て倹約家だと言い、倹約な者を見てケチだと言う。これを

論ずる者があっても、ケチと倹約との境いをはっきりさせたためしがない。倹約とケチとは、実は分（分度）において定まるのだ。分度が定まらなければ終日論議しても何の役にもたたない。その上、倹約かケチか、外形によって判断できぬことは、ちょうど精業か私欲かという場合と同じことだ。ここに農夫があって、朝早く起きて稲を刈るとする。これは精業か私欲か、誰にも区別ができない。それは、自分の田を刈れば精業なのだし、他人の田を刈れば私欲なのだ。同様にここに武士があって、粗衣粗食でむさくるしい家に住んでいるとする。これは倹約かケチか、誰にも判断がつくまい。もしその人が天分の禄高を守ってその職務のために用い、私生活の費用をはぶいて人に推し譲っているならば、それは君子の行ないであって、倹譲（倹約・推譲）の道である。反対に、もしその禄を惜しんでわざと使わず、米を虫食いにし、金を隠し、衣類を腐らせながら、その職務に事欠くようならば、これは小人の欲であって、ケチのためなのだ。こうして見れば、田畑の畦（あぜ）が定まり自他の区別が明らかになって、始めてその農夫が精業か私欲かの判断ができ、禄高が定まり、天分が明らかになって、始めてその武士が倹約かケチかの区別がつくのだ。業を勤めて分を譲り、人のためにするものは倹約である。私欲から財を惜しみ、己れのためにするものはケチである」（『語録』一七五）

「倹」の考え方を具体化したもの――具体的に数量化したもの――それが「分度」である。分度こそは報徳仕法の土台であり、根幹であり、出発点となるものである。

「天下には天下の分限があり、一国には一国の分限があり、一郡には一郡の分限があり、一村には一村の分限があり、一家には一家の分限がある。これは自然の天分である。天分によって支出の度を定めるのを分度という。末世の今日、人々はみな、ぜいたくを追い求めて、分度を守るものはきわめて少いが、分度を守らないかぎり、大きな国を領有してもやはり不足を生ずるし、分度を知らないものに至ってはなおさらのことである。たとえ世界中を領有したところでその不足を補うことはできない。なぜならば、天下には限りがあるが、ぜいたくには限りがないからである。いったい、分度と国家との関係は、家屋と土台石との関係のようなものだ。土台石があって始めて家屋が営造できるのと同様に、分度を定めた上で始めて国家は経理できる。分度をつつしんで守りさえすれば、余財は日々に生じて、国を富まし民を安んじることができるのだ」（『語録』六）

分度とは、平均であり、標準である。この考え方は、尊徳が愛読した『中庸』から学び取ったものである。

「わが法で分度を立てるには、国家盛衰貧富の中（ちゅう）をとる。何を「中」というかといえば、ものには人力を用いないでおのずからとどまるところのものがある。糸で玉をつるして、左に引け

ば右にゆき、右に引けば左にゆき、しばらく動揺しているが、ついにとどまるところがある。これが自然の「中」である。……一年に寒い時と暑い時とあり、日の長い時と短い時とあるが、春分と秋分とには、昼夜は等分であり、寒暑も平均していて、最も人体に適する。これもまた自然の「中」である。国家の盛衰もやはり同様であって、盛んな時は酷暑のごとく、衰えた時は厳寒のごとく、共に人心に適しない。それゆえ盛衰貧富を平均して、自然の「中」をとり、そうして分度を立てれば、万世の基準とするに足りるのである」（『語録』三〇一）

実際に各地で仕法を開始するに際しては、尊徳は事前に綿密な実態調査を行ない、それに基いて分度を中軸とした周到な事業計画を立案している。ほとんどの場合、過去十年間の年貢収納額の平均を分度と定め、これを今後十年間領主に納める上納米の限定とするという委任契約を結んでいる。[12] その結果、領主側（武士階級）は厳しい倹約生活を強いられることになる。だが、この窮乏生活を耐え忍べば、やがて仕法が成功し、十年後には年貢は二倍に増えて、領主も領民も共に安泰な生活が保障されるのである。報徳仕法が「興国安民の法」と呼ばれるのもそのためである。

「およそ分度は人道の本であって、勤怠・倹奢・譲奪・貧富・盛衰・治乱・存亡の由って生ずるところである。その分にしたがいその度を守るのを勤といい、その度をつづめて余財を生ずるのを倹といい、その余財を他に推し及ぼすのを譲という。勤にして倹、倹にして譲であれば

富盛に達する。国家が富盛を得れば治まり、治まればながく存続する。これに反して、その分にしたがわず、その度を守らないのを怠といい、その度を越え不足を生ずるのを奢といい、不足ならばこれを他から取ろうとするのを奪という。怠にして奢り、奢って奪う、これを衰貧という。国家が衰貧となれば乱れ、乱れれば滅びる。これによって見れば、国家の治乱存亡は貧富盛衰にあり、貧富盛衰は勤怠倹奢にあり、勤怠倹奢は分度に生ずるのである」（『報徳外記』第三章「分度」[注2参照]）

（四）奪うに益なく、譲るに益あり

自己の収入の中から分度を立てて余財を産み出し、それを社会公共のために提供することを報徳の用語で「譲（または推譲）」という。尊徳の村おこしの仕法の事業は、ほとんどの場合、何人かの人の推譲によって始められ、やがて多くの人たちの勤労と推譲に支えられて達成されていった。天保七年（一八三六年）の飢饉救済の直後に開始された烏山藩の仕法のときは、まず家老の菅谷八郎右衛門が尊徳の勧めに従って俸禄を辞退し、弓矢や馬具などのうち不急のもの七五点を売却して、その代金を仕法のための基金に推譲した。これに続いて藩士二四二人、および領内の町人や農民など一二六〇人から総計一〇八両、米二〇〇俵の推譲がなされ、領内の気運は大いに高まった。

また、小田原藩では、曾比・竹松・西大井などいくつかの村で仕法が実施され、勤労・推譲・相互扶助などに数多くの美談を残した。道路工事や用排水工事などには、千人を超える多数の人たち

が冥加人夫として無償の労力提供を申し出た。老人たちは喜寿や米寿の祝いにもらったものを報徳金のために差し出した。小さな子供までが、せっかく買ってもらった晴れ着を推譲したり、道で拾った小銭を仕法の世話係へ届け出たりしたのである。

晩年の尊徳は特に「推譲（譲）」ということを強調した。人々が互いに報徳の心で推譲し合うような協同社会の建設を願っていたのである。推譲に関しては数多くの訓戒を残している。

「身近なたとえを引けば、この湯ぶねの湯のようなものだ。これを手で自分のほうへかき寄せれば、湯はこちらへ来るようだけれども、みんな向こうのほうへ流れ帰ってしまう。これを向こうのほうへ押してみれば、湯は向こうのほうへ行くようだけれども、やはりこっちのほうへ流れて帰る。すこし押せば少し帰り、強く押せば強く帰る。これが天理なのだ。……人間の手は自分のほうへ向いて自分のために便利にもできているが、また向こうのほうへも向いて向こうへ押せるようにもできている。鳥獣の手はこれと違って、ただ自分のほうへ向いて自分に便利なようにしかできていない。人と生まれたからには、他人のために押す道がある。それを、わが身のほうに手を向けて、自分のために取ることばかり一生懸命で、先のほうに手を向けて他人のために押すことを忘れていたのでは、人であって人ではない。鳥獣と同じことだ。なんと恥かしいことではないか。だから、私は、常々、『奪うに益なく譲るに益あり、譲るに益あり奪うに益なし、これが天理だ』と教えている」（『夜話』一七二、原書三八）

「奪うに益なく、譲るに益あり」とは、まことに金言とすべき名句である。「情けは人のためならず」という諺のとおり、他に譲ることを先にすれば、やがて自分に帰ってくるのである。反対に、「人を呪わば穴二つ」で、他人を害すれば、やがて災いは本人に戻ってくるのである。

二　勤・倹・譲への心田開発

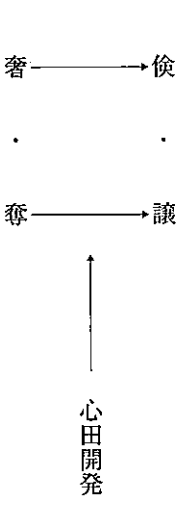
天保十三年（一八四二年）、五十六歳のとき、尊徳は幕臣に召し抱えられたが、仕事らしい仕事は与えられなかった。二年後の弘化元年（一八四四年）、久しぶりにご下命があり、日光東照宮領二万石の仕法に取り組むことになった。このことを聞いて喜んだ福住正兄（当時は大沢政吉。二宮塾への入門は翌弘化二年十月）やその兄の大沢勇助[13]らがお祝いのために尊徳の許へ駆けつけたところ、彼らに対して尊徳は次のように語っている。

「私の本願は、人々の心の田の荒廃（荒蕪）を開拓して、天から授かった善い種、すなわち仁義礼智というものを培養して、この善種を収穫して、又蒔き返し蒔き返して国家に善種を蒔き広めることにあるのだ。ところが今度の命令は土地の荒廃の開拓なのだから、私の本願にたがうことはそなたも承知のはずではないか。それなのに遠くから来て、この命令があったのを祝うとは何ごとだ。それも『本意にそむいた命令ではありますが、命令とあっては余儀ないこと

で、及ばずながら私どももお手伝いしましょう』とこう言うなら、喜びもしよう。さもなければ、私は喜ばない。そもそも我が道は、人々の心の荒廃を開くのを本意とする。一人の心の荒廃が開けたならば、土地の荒廃は何万町歩あろうと心配することはないからだ」（『夜話』六三、原書五九）

人々の「心田開発」をすることこそ、生涯をかけての尊徳の願いだったのだ。具体的には、「怠・奢・奪から勤・倹・譲への心田開発」であり、これこそが二宮尊徳の道徳教育理論の中核となるものである。

図2



いうまでもなく、道徳教育という問題は大変に難しい問題である。道徳教育が難しい理由・原因はいろいろとあるが、その一つは、人間の心が、「善とされるもの」よりも「悪とされるもの」の

ほうに動きやすいからである。報徳の用語でいえば、勤・倹・譲よりは怠・奢・奪のほうに傾きやすい、ということである。尊徳はその哲学的な著作『悟道草案』の中の「譲奪ノ部」という章の中で「一物アレバ譲奪ヲ生ズ」と書いている。[14] そして、次のような歌を詠んでいる。

秋くれば山田の稲を鳥と猿
　猪（しし）とよる昼あらそいにけり

だが、怠・奢・奪は鳥や獣の道――鳥獣道――であり、勤・倹・譲こそ人間として踏み行なうべき「人倫の道（人道）」である。現代的にいえば、倫理的道徳的な行為規範――モラル・コード――である。そして、このような人倫の道は、その昔、堯（ぎょう）や舜（しゅん）などの聖賢たちが万人の幸福のために樹立したものである、と尊徳はいう。

「人倫の道は、人が作ったものである。鳥獣の道は自然に成り立つ」（『語録』三四九）

「聖人は天理に基づいて大法を作り、それによって天下を治めた。それゆえ法というものは、人為であって自然ではないのだ。これを畑にたとえれば、耕し草とりをしないかぎり、たちまち野原になってしまう。またこれを調髪にたとえれば、調髪をしないかぎり、たちまち髪ぼう

ぼうになってしまう。だから耕作や調髪は、みな人為であって自然ではないのだ。国家を治める者は、よろしくその自然を悟り、努めて人為の大法を厳にすべきである。思うに聖人は推譲をもって人間の道とし、掠奪をもって鳥獣の道とした。譲れば財貨は日々に増し、奪えば財貨は日々に減ずる。ここに芋が一つあるとする。これを奪って食えば一つの芋にとどまる。これが貧困の本なのだ。これを譲って植えれば十個の芋が得られ、再三くりかえし植えれば倍増すること限りがない。これが富栄の本なのだ。聖人は大法を設けて掠奪を禁じ推譲を勧め、そうして四海を富まし、長く天下を保った。聖人の欲するところも、なんと大きなものではないか」

（『語録』三八六）[15]

三　一心が治まれば万心が治まる

東京・芝の増上寺の境内に法然上人の次のような歌を刻んだ石碑が建てられている。

池の水人の心に似たりけり
　濁り澄むこと定めなければ

ニュアンスは多少異なるが、尊徳も似たような言葉を書き残している（『大円鏡』の「善悪ノ解」。引用は佐々井信太郎氏の訳による）。[16]

「それ元一円行い（一心）である。行いを分かって善悪がある。善が無ければ悪はなく悪がなければ善はない。善があれば悪があり悪があれば善がある。天地が開びゃくしてから万代に至るまで、善悪有無増減はない。このゆえに天道自然という。
一善があれば一悪があり、十善があれば十悪がある。百善があれば百悪があり、千善があれば千悪があり、万善があれば万悪がある。天地が開びゃくしてから万代に至るまで善悪増減はない。このゆえに天道自然という。」

尊徳は、また、次のように語っている。

「善悪の論ははなはだむずかしい。本来を論ずれば、善もなく、悪もない。善といって区別するから悪というものができるのだ。もともと人間の身の勝手な都合からできたもので、私のいう人道の上のものなのだ。それゆえ、人間がなければ善悪はない。人間があって、それからのち善悪があるのだ。だから、人間は荒地を開くのを善として、田畑を荒らすのを悪とするけれども、いのししやしかのほうでは、開拓を悪として荒らすのを善とするだろう。世の中のおきては盗むことを悪とするけれども、盗びと仲間では盗みを善として、これを取り締まるほうを悪とするだろう。してみれば、どういうものがいったい善か、どういうものがいったい悪か、

この道理はなかなかわかりにくい。……禍福でも、吉凶でも、是非でも、得失でも、みんなこれと同じだ。禍福も一つだ。善悪も一つだ。得失も一つだ。もともと一つであるものの半分を善とすれば、あとの半分は必ず悪になる。それを、あとの半分にも悪がないように願うのは、できないことを願うものだ」（『夜話』一〇七、原書二六）

要するに、尊徳の言わんとすることは、善とか悪とかいうことは相対的なものであり、また、人間の心の中には「善の心」と「悪の心」とが混在し共存しているのだ、ということである。だから、やり方次第では、つまり、誰かが効果的な方法で上手に働きかけていくならば、人間の心を善なるものの方向へ導いていくことができるはずだ、ということである。このことについて、尊徳は、『三才報徳金毛録』の中の「一心治乱ノ解」という章で「一心が治まれば万心が治まる」と次のように述べている（全文を引用すると長くなるので要点のみにとどめる。なお原文は漢文）。[17]

「ソレ本一円一人ナリ。一人変化シテ万人トナル。万人アレバ万心ヲ発ス。万心アレバ善心ヲ交ユ。善心アレバ悪心アリ。悪心アレバ離叛心ヲ発ス。……ソノ本ヲ思エバ則チ一人一心ナリ。一心ヲ乱セバ十心ヲ乱ス。一心治マレバ十心治マル。百心ヲ乱セバ千心ヲ乱ス。千心治マレバ万心治マル。焉チ此レ天理自然トイフ。故ニ君子ハ必ズソノ独リヲ慎シムナリ」

ここで考察しているようなテーマは、現代的な表現で言い換えるならば、「態度変容」とか「動機づけ」の問題として捉えることができるであろう。『全集』の編集者・佐々井信太郎氏は、その著『報徳生活の原理と方法』[18]の中で、学術的な表現ではないが、むしろ理解しやすい平易な表現で、「行為の選択」であり、「絶えざる努力の継続」である、と次のように述べておられる。

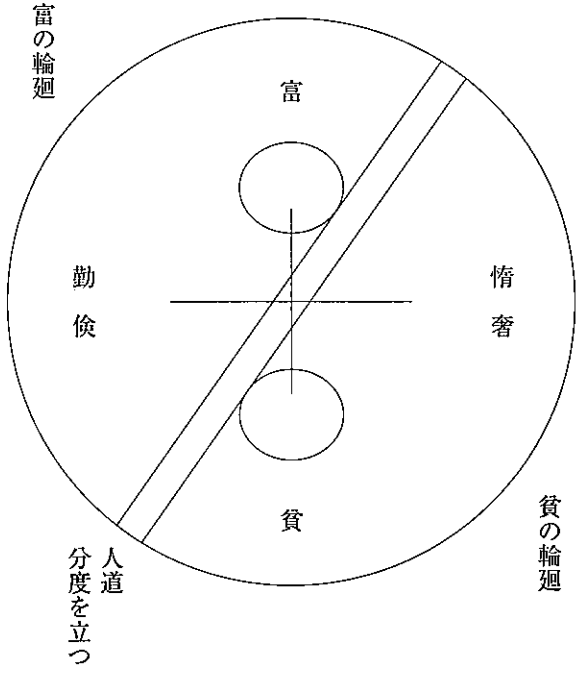
「人道における一円融合の実現は、人類の断えざる努力の継続によって永続する。天道は太陽の休息することのないように、自然の運行をしている。これに比して人道は行為を選択する……」

そして次のような図解を示しておられる（図3）。[19]

尊徳自身の例として、こんなことがあった。文政元年（一八一八年）、三十二歳のとき、彼は小田原藩主大久保忠真公から篤農家の一人として善行表彰された。その表彰文の中に「その身はもちろん村ためにもなり」という一節があった。つまり、そなたのやってきたことは、自分のためでもあるが、村のためにもなっているのだ、ということである。自分はこれまで「自分のため（我が家の再興のため）」とがんばってきたが、世のため人のためにもなっているのだ。そうであれば、これからは「自他を振り替えて」世のため人のためにつくすことを先にすれば、それが自分のためにもなるはずだ、と心の持ち方の切り換え——態度の変容——をすることにした（自他振替）。[20]そし

て、そのような態度・行動を生涯にわたって貫き通したのである。

図3　富の輪廻



四　微かな道心で危うい人心を戒める

人間の本来の性質が善であるか悪であるかという議論と関連づけていうならば、尊徳の人間観は性善説でもなく性悪説でもない。人間の心の中には善心と悪心が共に存在していると見るのが尊徳

の人間観である。

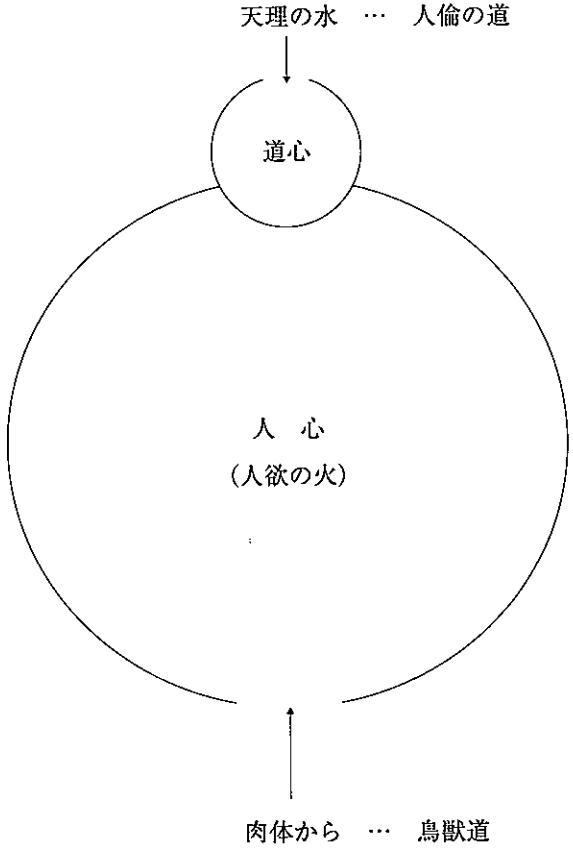
では、その善心と悪心のそれぞれの分量はどうなっているのだろうか。長い目で平均的に捉えれば、均等に存在しているのだろうか。そうではない。圧倒的に――と言っても過言ではないほどに――悪心のほうが大きく強いのである。だから、尊徳の人間観は、かなり性悪説に近いと言うべきである。『書経（大禹謨編）』の中の「人心」「道心」という用語を借りて、彼は次のように述べている。

「『書経』（大禹謨編）に、『人心これ危うく、道心これ微かなり』とある。人心とは何かといえば、肉体に基いて、人欲から出るところのものである。これは、たとえば荒地のようなもので、雑草を刈り取って、ひらいて新田にしても、日々に雑草が生じて再び荒地にもどろうとする。だから、まことに「危うい」ものである。では、道心とは何かというと、肉体を離れて天理から出るところのものである。これは、たとえば良田のようなもので、深く耕して稲を植えても、草とり肥しかけに努めなければ、やがて荒地になってしまう。だから、「微か」だというのである。そうしてみると、その危うい人心を治め、その微かな道心を拡めるには、精農が耕し草とりに努めるようにしなければならぬ。私が、心の荒地を開発するのが先務だと説くわけは、ここにある。わが道を行なう者は、よろしく人欲の火を抑え、天理の水をそそいで、心田を治めるべきである」（『語録』三九）

図式化すれば、こうなる（図4）。

人倫の道（人道）を実践することがいかに難しいか理解できるであろう。皆が手をこまねいて、ものごとを成り行きのままに放置しておくならば、この人間世界は、互いに奪い合うだけの鳥や獣の世界と同じことになってしまう。誰かが率先して人倫の道を踏み行ない、それを周囲に推し及ぼ

図4



していくならば、この世に「勤・倹・譲の理想郷」が実現できるはずである。実際に尊徳自身が指導者として仕法を推進した村々では、村の気風が一変するような成果をあげている。

「遊惰は変じて精励となり、汚俗は化して篤行となり、荒地はひらけて田畑となり、家ごと人ごとに満ち足りて、一人をも罰せず、一人をも刑せず、獄舎は腐朽しても修理を加える必要はなかった」（『報徳外記』第二五章「報徳」[注2参照]）といわれるほどに様変わりしたのである。

たとえば、桜町領（現栃木県芳賀郡二宮町。尊徳が初めて報徳仕法を実施した所）では、「畔（あぜ）の譲り」と呼ばれる次のような美談が語り継がれている。天保六年（一八一五年）五月、物井村（桜町領内三ヶ村の一つ）の善太郎という者が、「荒地開発に付き、畔を譲り候段、一通りならず誠直に候」として表彰を受け、米一五俵の褒美を頂いている[21]（なお、表彰は尊徳がたびたび実施した施策である）。

この頃、大久保忠真公の命令で桜町領内を視察した小田原藩勘定奉行の鵜沢作右衛門は、村内の美風感化の様子に感激して、その模様を殿様に報告しているが、のちに『深山木』という感想文に次のように書き記している。

「村方小前（むらかたこまえ）（零細農民）の者共まで一同気配至てよろしく、相互に畔を譲り合う論談ばかり仕（つかまつ）り候……銘々私欲がましき儀は少しも無く……」[22]

心ある指導者が効果的な働きかけをするならば、このようになるのである。そのためには、指導者が自らを戒め、深く自省自覚すべきである。尊徳は、弟子たちに、次のようにこんこんと諭している。彼らは、やがて、仕法推進のリーダーとなるべき者たちである。

「人を戒めようと思ったら、まずみずから戒めることが肝心である。まず自分の道心で自分の人心を戒めてみて、人心が言うことをきいたならば、他人を戒める資格がある。いったい道心と人心とは、狭い胸の中に雑居して、しばらくも離れないものだ。しばらくも離れずにいる道心が戒めて、それでも人心が言うことをきかないのなら、たとえ他人を戒めても、だれが聞きいれるものか。……十人がみずから戒めれば十人がそれで修まり、百人がみずから戒めれば百人がそれで修まり、千人万人がみずから戒めれば、千人万人の修養ができる。これこそ天下の幸福である」（『語録』四五）

五　さまざまな実地の教育・指導

「報徳仕法」と呼ばれる尊徳流の村おこしの事業を推進するに当っては、指導者の心がまえが重要だが、指導の技術がないわけではない。現場主義・現物主義に則ったさまざまな指導方法があり、それらを通して人々の心田は開発され、やがて仕法の事業はみごとに完遂されていくのである。

(一)　書いた豆は馬は喰わない

天保十年（一八三九年、尊徳五十三歳）六月、相馬藩（福島県相馬市）の若き藩士・富田高慶（当時二六歳）が、桜町陣屋の尊徳の許を訪れ、弟子にしてほしい、と願い出た。高慶は、藩財政窮乏の現状を憂え、十七歳のとき、財政再建の方策を求めて上京し、国学者・屋代弘賢や昌平校の儒官・依田源田左衛門などの門下として、『大学』『論語』『中庸』などを通して聖賢の道を学習していたが、具体的な経済政策については、ほとんど得るところがなく悩んでいたところ、たまたま二宮尊徳の話を聞いて、この人こそ自分の師とすべき人と心に決めて、桜町へやってきたのだった。

当時、尊徳は、近隣の青木村や、谷田部茂木藩（細川領）、烏山藩、下館藩など各地の仕法の指導で多忙をきわめ、また、小田原領内数ヶ村の仕法指導のために長期に出張していて、富田高慶と面会する暇もないほどだった。また、「儒学を修めた」という高慶の触れ込みが尊徳を敬遠させることもあったようである。だが、やがて、高慶の熱意が伝わったのか、九月には面会を許されることになった。その初対面のとき、「豆の話」と呼ばれる次のような逸話が語り継がれている。[23]

高慶が学業研鑽の苦心や相馬藩再建への熱意を語るのを静かに聞いていた尊徳は、突然、一枚の紙と筆を取り出して、そこへ豆という字を書くように、と高慶に言いつけた。彼は言いつけに素直に従って豆という字を書いた。すると、尊徳は、その紙を持たせて高慶を馬小屋へ連れていき、「それを馬に喰わせてみろ」と命じた。むろん、馬は見向きもしない。やがて、尊徳は傍らの袋から実物の豆を取り出して馬に差し出したところ、馬は喜んでそれを食べた、というはなしである。

このエピソードは、尊徳の現場主義・現物主義の考え方を示す例として、報徳に関心のある人たちの間では広く知られたものである。ただ、注意しなければならないのは、尊徳はけっして「学問は不要だ」と言っているのではないことである。学習したことを現実の生活の中で活用しなければ意味がないということを、実地に身を以って教え諭しているのである。尊徳は次のように語っている。

「書物を読んで実践しないものは、鍬を買って耕さないのと同じことだ。耕さないのならどうして鍬を買う必要があろう。行なわないなら、どうして書物を読む必要があろう。読書と実践と相俟つことは、ちょうど、織物が縦糸と横糸とあって始めてできあがるのと同様である。読書は縦糸であり、実践は横糸である。縦糸だけあって横糸がなければ織ることができない。織らなければどうして絹や布ができよう。織らなければどうして家をととのえ、国を治める仕事が成就できようか」（『語録』七六）

その後、富田高慶は、尊徳の許で実地の修行に励み、尊徳の手足となったり、時には身代わりとなったりしながら、報徳仕法の理論と方法を着実に体得していった。そして、後に相馬藩の仕法推進に際しては中心的な役割を果たして、事業を成功に導いたのである。

また、尊徳からの信頼も厚く、尊徳の娘・文（ふみ）の婿となり、尊徳の死後、『報徳記』という尊徳の伝記を書き残して、尊徳の名が広く海外にまで知られることになる端緒をつくったのである。

(二) 教と養を兼ね行なう

尊徳の時代、我が国の農村は、ほぼ全国的に衰廃の極に達していた。桜町領の場合、米の生産高は、百年前の元禄時代には約三〇〇〇石あったものが、百年後、尊徳が仕法に着手した文政五年（一八二二年）の頃には、三分の一の約一〇〇〇石に激減していた。農民たちは勤労意欲をなくして、耕作を放棄して夜逃げ（欠け落ち）をしてしまい、二〇〇〇石を産出するはずの田地が荒地となって放置されていたのである。その上、天明三年（一七八三年）の大飢饉や、天保四年（一八三三年）と七年（一八三六）の大凶作のため、全国各地で多数の餓死者を出し、一揆や打ちこわしが多発していたのが尊徳の時代の農村の実態である。

さて、このように経済的に窮乏の極に達していた極貧・極難の農民たちに対して、勤・倹・譲への心田開発の指導は、どうあるべきだろうか。精神的な指導・教化よりも、経済的な支援——窮民撫育——が先行することになるはずである。だが、このような場合でも、心田開発への配慮を忘れないのが尊徳流のやり方である。

「怠惰な貧民が、米もないのに、精励な良民で米のある者と同じに、正月の餅を食う。だから

貧困をのがれられないのだ。たとえこの貧民がもち米を借りに来ても、おいそれと貸してはならない。こう言って戒めさとすがよい。『お前は一年中なまけておったくせに、よく働いた者と同じに正月の餅を食おうというのは、心得違いだ。いったい元日はにわかに来るものではない。もち米はひょっこりできるものではない。三百六十日を積んで元日が来、春は耕し夏は草とり、その勤労を積んでもち米がとれるのだ。お前は春に耕さず、夏は草をとらなかった。だからもち米がない。どうして正月の餅が食えるというのだ。たとえ借りてこれを食っても、返しようがないではないか。どうしても食いたいと思うならば、さっそく山林に行って、落葉をかき、それを田の肥しにして、耕し草とりを怠らず、秋のみのりを得て、それから餅を食うがよい』。このように教えれば、貧民も必ず、なるほど勤めなければ食うことができないのだと悟って、来年勤労してそれから食おうという気持をおこす。そこではじめてもち米を貸して、食わせてやる。それを教養――教えることと養うことと――兼ね至ると言うのである」（『語録』二九五）

つまり、精神的な教化「教」と経済的な援助「養」とは、コインの表と裏のように、表裏一体として兼ね行なうべきだ、と尊徳はいうのである。

(三) 教化とは身を以って導くこと

報徳仕法の具体的な施策としては、表彰、貸付け、芋コジ（集団討議）など、いろいろなものがあるが、「回村」と呼ばれるものもその一つである。回村とは、仕法の指導者が朝早く起きて村の中をぐるぐると巡回することである。一番鶏の声で起きて、夜明け前の星空を仰ぎ見ながら巡回するので、「鶏晨回村（または、回邑）」とも言われている。

村人たちに早起きを奨励するのであれば、まず、リーダー自身が率先して早起きして、人々の模範となるべきなのだ。このようなリーダーの心得について、尊徳は次のように語っている。

「自分が早起きしてのちに民にこれを教え、自分がおそく寝てのちに民にこれを教え、自分が精励してのちこれを民に推しひろめ、自分が節倹を行なってのちこれを民に及ぼし、自分が忠信孝弟であってのち民を導く。百行みな同様である。それでもなお民にふるい立たぬ者があるとしたならば、それはわが心に誠実の至らぬものがあるためである。……衰村に臨んでその民を治めようとする者は、必ず自ら誓うがよい。村の中にもし飢える者があれば自分は喰わない。寒い夜もし夜着がない者があれば自分も夜着を用いない。夏の夜もしかやのない者があれば自分もかやを張らない。夜の三更（一二時）を過ぎてまだ休まない者があれば自分も寝につかない。……もし心がここになく、口から耳へと諭とし、詐術をもって率い、刑罰をもって威したならば、終世心力を尽くしても美風感化の功を見ることはできない。……身をもってこれを導

くのでない限り、面とむかっていくら言いきかせ、多くの日数を重ねても、決して効果はない。それゆえ、衰村の民を導くには、鶏晨回邑（一番鶏の鳴く声と共に起きて、夜明け前の星空を仰ぎ見ながら邑（村）の中を巡回すること）を先務とするのだ」（『報徳外記』二〇章「教化（中）」）

また、次のようにも語っている。

「およそ道というものは、上がみずから行なうのでなければ、下は従わない」（『外記』二五章「報徳」）

このように、社会的に影響力のある人の態度・行動がモデルとしての役割を果たして他の人々の態度・行動に作用を及ぼす働きのことを社会心理学の用語で「モデリング（モデル効果）」といい、道徳教育を考える上で重要なキー・ワードとなるものである。

（四）機会を捉えて教える

尊徳とその門人たちとの一団は、時に「二宮塾」と呼ばれることがある。だが、この塾では、普通の塾のような学科や授業は行なわれない。弟子たちは、尊徳が仕法指導のため各地へ出かけると

きに付き従い、実地の事業推進の中で、業務の一部を分担したりしながら、尊徳のやり方や考え方を見習っていくのである。

しかしながら、講義のようなことが全くなかったわけではない。むしろ、いろいろな機会を捉えて、かなりひんぱんに解説や訓戒がなされた。弟子たちは、先生の教訓を事細かにメモ書きしておいて、のちに著作のような形にまとめている。斎藤高行の『二宮先生語録』や福住正兄の『二宮翁夜話』などは、そのようにして出来上がったものであり、二宮尊徳の実践哲学の内容を知る上で貴重な資料となっているのである。そのような教訓のいくつかを紹介することとしたい。

「すずりばこの墨が曲っていた。翁はこれを見ていわれた。――すべて職務を執行する者は、心を正しく平らに持とうと心がけるがよい。だれも曲げようと思って墨をする者はいないが、手の力が自然に傾くためにこのように曲るのだ。いまこれを直そうとしても容易に直るものではない。百事そのとおりで、喜怒愛憎ともに自然に傾くものだ。傾けば曲るはずだ。よく心がけて、心は正しく平らに持たねばならぬ」（『夜話』七三、原書二〇八）

「翁がある寺に参詣されると、灌仏会があった。そこでいわれた。――天上天下唯我独尊ということを侠客の連中などが広言を吐いて「天下がいくら広かろうと、おれに及ぶ者はあるめえ」などというのと同様に釈迦の自慢だと思っている者がある。それは間違いだ。これは、釈迦ば

かりでなく、世界じゅうみんな、我も人も、ただこの我こそ天上にも天下にも尊いものなのだ、我にまさって尊いものは決してないのだぞという、教訓のことばなのだ。だからして、銘々おのおの、このわが身が天地間にこの上なく尊いものなのだ。なぜならば、天地間に我というものがなければ、他の物はないようなものだからだ。だから銘々おのおのみんな、天上天下唯我独尊だ。犬も独尊ならたかも独尊、ねこもしゃくしも独尊といってよいものだ」（『夜話』四五、原書一七〇）

『語録』や『夜話』のほかにも、豊田正作の『報徳教林』、鵜沢作右衛門の『報徳教聞書』『深山木』、川崎屋孫右衛門の『報徳見聞記』など、門人たちによる尊徳の説話が数多く残されている（なお、これらは報徳博物館資料集『尊徳門人聞書集』（一九九二年）にまとめられている）。

さて、次に紹介する逸話も、尊徳の「自他一円」の哲学を身近かな出来ごとに即して教え諭したものとして、ぜひ紹介させて頂きたい。以下は佐々井典比古『尊徳の森』（有隣堂、一九九八年）一七五頁からの引用である。

「尊徳が（小田原領内の）竹松村か曽比（そび）村に滞在して、領内の仕法を推進していた天保十一年（一八四〇年）の春のこと。ある日尊徳は（大島）儀左衛門（下館藩士（しもだて））を連れて、西から東への仮橋を渡りかけた。ただでも足の速い尊徳がスタスタと先へ行くと、橋の真ん中で後ろを

向いて立ち止り、「通せんぼ」の格好をした。そして問いかけた。「儀左衛門、この川は右か左か、どっちに流れている？」儀左衛門は戸惑ったが、自分の右手を意識して「右です」と答えた。すると尊徳は「ばかを言え、わしの手をよく見ろ。左手のほうへ流れているぞ。」と言った。そこで左と答えれば、今度は「お前の右手をみろ。」とやられるだろう。こうして儀左衛門を困り果てさせた上で、左右も上下も売買も不離一円のものであると気づかせる、実地教育をしたのではなかろうか。」

（五）巧みな比喩で諭す

尊徳の訓戒や説諭には大変分かりやすいものが多い。その理由の一つは、「分度」「推譲」「一円」などの抽象的な概念を具体な身近な事柄になぞらえて、つまり比喩を用いて解説しているものが多いからである。聞く者は具体的なイメージと重ね合わせながら、尊徳の思想を理解することができる。これまでに引用したものの中にも比喩を用いたものは多くあるが、やはり、二、三、紹介させて頂きたい。

「貧富は分度を守るか分度を失うかによって生ずる。分度を守って、みだりに分内の財を散らさなければ富に至るし、分度を失い、他から借財して分内に入れれば、やがて貧に陥るのである。負債によって分内を補うのは、たとえばたらいの水に石を入れるようなものだ。一つ石を

入れれば石一つだけの水が減り、十個の石を入れれば石十個分が減り、百個千個の石をいれればたらいの水は皆なくなってしまう。実際、負債が家産を減ずるのはこういう具合で、ただ貧乏に陥るだけではすまない。ついに家を滅ぼすようになる。用心しないでいられようか」（『語録』二〇）

「仏教は三世を説く。肉眼ではこの三世を通観することができない。これを迷いという。心眼はよく三世を通観できる。これを悟りという。いま一本の豆草でこれを説明するならば、豆草にも三世がある。現在豆草であるとすると、その過去を悟れば豆種であり、その未来を悟っても豆種である。現在豆種であるとすると、その過去を悟れば豆草であり、その未来を悟っても豆草である。三世を迷うのも悟るのもつまりは一つである。種草花実もまた一つである。ただその居所によって名が異なるだけなのだ」（『語録』二四〇）

（六）『大学』を道歌で料理する

尊徳は自分の思想を教訓的な道歌に託して表現することを得意とした。『二宮尊徳全集』（第一巻「原理編」）には、「三才独楽集」と題して、約三百の道歌が収められている。このほかにも、「大学料理」という名称で親しまれている道歌集のようなものが、『全集』（第六巻）一〇一五頁以下に載せられている。[24]

これらは、もともとは浦賀（神奈川県横須賀市内）の商人・宮原屋の一族に当てた書簡の一部である。宮原屋および近くの三崎（同横須賀市内）の湊屋などは、天保九年（一八三八年）の頃から、桜町陣屋を訪れたりして、尊徳の指導を受けて、仕法を推進していた。「大学料理」と呼ばれるものは、天保一二年一二月に尊徳が宮原屋宛に送った書状の一部で、末尾に追伸の形で書かれたものである。

明徳を明らかにするにあり（『大学』経一章）
　豊あしのふか野が原を田となして
　　食をもとめてくらふ楽しさ
民に親しむにあり（同）
　田をひらき米を作りてほどこせば
　　いのちあるものみな服すらん
至善に止まるにあり（同）
　田を作り食を求めて譲りなば
　　いく世へるともこれに止まる

ごらんのように、これらは儒教の経典『大学』の語句を尊徳流に解釈して道歌の形で表現したも

のである。儒教の立場からみて尊徳の解釈が正しいかどうかは別として、現代の我々からすれば、尊徳が儒教の語句をどのように理解したかを知ることができ、そこから尊徳の思想内容を探る手がかりが得られる。また、道歌を示された側にとっては、自分たちが当面の仕法を推進する上での示唆を儒教の経典から直接に取り出すことは大変にむずかしいので――『大学』や『論語』などには経済政策的な記述はほとんどないので――尊徳が道歌によって具体的な説諭・訓戒を与えてくれたことは、すこぶるありがたいことだったはずである。当時、尊徳の道歌が多くの人から尊重された理由もそこにあったといってよいであろう。

(七)『中庸』も噛み砕けば、こうなる

『二宮尊徳全集』第十九巻の冒頭の「藤曲村仕法書」の中には、「天命十訓」と呼ばれる興味深い教訓が収録されている。儒教のもう一つの経典『中庸』の語句を尊徳が自己流に解釈して、藤曲村の農民たちのために噛み砕いて講釈したものである。第一訓、第二訓から第十訓まであるので、「十訓」と称されている。ここでは比較的理解しやすいものとして、第五訓を取り上げることとしたい。

それぞれの訓話は、三つの部分から構成されている。初めに「聖語にいう、……」として、『中庸』第一章第一節の冒頭の語句が引用される（引用は佐々井信太郎氏の訳による）[25]。

「聖語にいう、天命はこれを性といい、性にしたがうこれを道といい、道を修めるこれを教という。道こそはしばらくも離れてはならない。離れてよいようなものは道ではない」

次いで、この語句についての尊徳流の講釈が日常の身近かな事柄になぞらえて示される。

「天命今朝は雨降りである。雨ふれば雨のふる所がすなわち天性自然である。天性自然の雨降りにしたがってみのかさを着用して働く、これを道という。このみのかさを着用する道はしばらくも離れてはならない、はなれた時は今日の道ではない。今日の道によらないでみのかさを着用しなければ、果して雨降りの道ではない。雨降りの道を勤めないでぬれた時は難渋する。難渋して後悔しないものは町村にすくない」

これを私見を混じえて現代的な表現で言い換えるならば、次のようになる。雨降りなどのように自己の意思によるのではなく他律的外在的に与えられた状況・条件の下にあっても、主体的自律的な意志や努力によって為すべき職分・任務があるはずである。雨降りの時はみのかさを着けて仕事をすればよい。このようにして、その職分・任務を遂行することが人間として踏み行なうべき「人倫の道」である、ということである。

続いて、このあとに再び『中庸』（第十四章第二節）の「患難に素して患難に行なう」という語

句を尊徳流に改作したものが次のように示されて、一つの訓話がしめくくられる。

「又いう、雨降りにもとづいて雨降りの道を行なえば、町村民はどこにいても自得しないものはない」

このような訓戒が、第一訓（富貴の場合）、第二訓（貧困の場合）……などの要領で、十の場合を想定して提示されているのである。これらの訓戒には、数々の苦境を乗り越えてきた尊徳自身の体験がこめられているように感じられる。

ところで、「藤村仕法書」の中には、「天命十訓」のほかにも、『中庸』の語句が引用されているところがいくつかある。「誠（至誠）」に関する重要なものについて紹介させて頂きたい。[26]

「誠なる自りして明かなる、之を性と謂う。明かなる自りして誠なる、之を教と謂う。誠なれば則ち明かなり。明かなれば則ち誠なり」（『中庸』第二十一章）

これについては『語録』（一八三）が簡潔・明瞭に次のように解説している。

「……これは、縄をなうのにたとえると、一房なって銭に換えれば四文になり、銭を四文払えば縄が一房来る。これを『誠なればすなわち明らかなり。明らかなればすなわち誠なり』と言うのだ。縄を出して銭に換え、銭を出して縄に換え、万世までも止むことがない。これを『至誠は息むことなし』[27]と言うのだ。また米を量るのにたとえると、桝を使って量れば何回くりかえしても決して違わない。これを至誠と言うのだ。また珠玉でたとえるならば、上下四方からみてきずのないものが至誠であって、一方だけからみてきずのないものは至誠ではないのである」

（八）「芋コジ」による集団的な啓発

報徳仕法の施策の一つとして、「芋コジ」と呼ばれる集団的な技法がある。古くから各地で行なわれてきた「寄り合い」を活用したもので、現代的にいえば、集会、とか、ミーティング、グループワークなどのようなものである。芋コジの本来の意味は、桶に里芋と水を入れて、コジ棒でゴロリ、ゴロリとこじりながら里芋を洗っていくことである。桶の中で芋同士が擦り合わされ、泥が落ち皮が剥けて芋がきれいになっていく様子が、集団の中での衆知結集や相互啓発――集団的な心田開発――の様子に似ているところから、尊徳自身が名づけたものである。芋コジについては、福住正兄が『富国捷径』（初編）第三「会議の弁」[28]の中で次のように述べている。

「身の修め方、世間のつき合い、家業の得失、農業のしかた、商法の掛引き、心配筋のこと、

自分に決しがたいことなど、みな打ちあけて相談して、それよりはこのほうがよい、これよりはあのほうがよろしい、また、これよりはこのほうが徳だ、それよりもこのほうが便利だ、と相互に相談するのでござる。……この集会をなすことを、二宮先生は芋こじと常に申されたでござる。これは、集会にたびたび出るは芋こじをするようなもので、相互にすり合って汚れがおちて、清浄になるというたとえでござる」

さて、これまでに述べてきたようないろいろな方法を実施することによって、仕法推進の指導者をはじめ村人たちの心田が開発され、それにつれて村全体の雰囲気が良好なものとなり、やがて、荒地の開発、借財の償還、財政の再建が実現して、報徳仕法は見事に完遂されていくのである。

〈注〉

(1) 富田高慶原著・佐々井典比古訳注『補注報徳記』(一円融合会刊、一九四五年)巻二第九章「青木村の衰廃を興こす」。

(2) 斎藤高行原著・佐々井典比古訳注『報徳外記』(一円融合会刊、一九五八年)。

(3) 福住正兄原著・佐々井典比古訳注『訳注二宮翁夜話』(一円融合会刊、一九五八年)。以下『夜話』と略記。なお、『夜話』の章番号は、この一円融合会刊のものによる。原書番号とは、『二宮尊徳全集(全三六巻)』(佐々井信太郎責任編集、二宮尊徳偉業宣揚会刊、初版一九三二年)の第三六巻「別輯門人集」に収録のものの番号のこと。岩波文庫版もこの原書番号と同じである。

(4) 尊徳の道歌(教訓的な和歌)については、佐々井信太郎著『解説二宮先生道歌解』(一円融合会刊、一九五九年)、および『二宮尊徳全集』(以下『全集』と略記)第一巻「原理編」八五五頁以下の「三才独楽集」などを参照のこと。

(5) 斎藤高行原著・佐々井典比古訳注『訳注二宮先生語録』(一円融合会刊、一九五八年)。以下『語録』と略記。

(6) 佐々井信太郎訳注(二宮尊徳原著)『報徳文献選集』(一円融合会刊、一九五五年)二四頁「報徳開びゃく史観図解」、および『全集』一巻三〇四頁「三世観通悟道伝」。

(7) 『全集』一巻「原理編」三九頁「富貴貧賤ノ解」、および、同五七五頁『報徳訓』第五九章「貧富訓」の二箇所に、ほぼ同様のものが収録されている。なお、「報徳訓」とよばれるものには二種類がある。一つは「父母の根元は天地の命令にあり」という文言で始まり、全文で一二行から成る短いもので、広く朗唱されているもの。もう一つは『報徳訓』と題して第一章から第八二章に至るまで五五ページに及ぶ長文のもので、ここに引用したのは、この長文のものの第五九章に相当するものである。

(8) 『全集』一巻六一六頁および六二三頁「天祿増減鏡」。

(9) 佐々井典比古「報徳の生き方・考え方——報徳訓の勉強を中心に——」(『かいびゃく』一円融合会、第四一巻第四号、一九九二年四月号)。

(10) 『全集』一巻三四頁「上下貫通弁用ノ解」。

(11) 『全集』五巻一一六五頁。

(12) 宮西一積『報徳仕法史』(一円融合会刊、一九五六年)。

(13) 大沢家は相模国大住郡片岡村(現神奈川県平塚市片岡)の大きな名主で、当主は市左衛門。天保十一年(一八四〇年)から村の運営に関して尊徳の指導を受けていた。福住正兄(当時は大沢政吉)はその五男で、勇助はその次兄にあたる。

(14) 『全集』一巻「原理編」四六〇頁。

(15) 勤・倹の成果である余財を他人のために(社会公共のために)推し譲ることを「他譲」というのに対して、自己(または子孫)のために譲り残すことは「自譲」と呼ばれる。佐々井典比古『生活原理としての報徳』(報徳文庫、一九八三年)他参照。

(16) 佐々井信太郎訳注『報徳文献選集』(一円融合会刊、一九五五年)二〇頁、および『全集』一巻七八頁。

(17) 『全集』一巻二七頁。
(18) 佐々井信太郎著『報徳生活の原理と方法』（一円融合会刊、一九五五年）八八頁。
(19) 同書九一頁。
(20) 『全集』二〇巻七四一頁「勤方住居窺奉候書付」。
(21) 『全集』一〇巻一〇二八頁。
(22) 報徳博物館資料集『尊徳門人聞書集』（報徳博物館刊、一九九二年）七七―七八頁。
(23) 『相馬報徳読本』（福島県相馬市教育委員会刊、一九八一年）六二頁、八木繁樹『ほうとくまんだら』（不二出版、一九八三年）一八一頁、他。
(24) 『全集』六巻一〇一五頁以下、および佐々井信太郎訳注『報徳文献選集』（一円融合会刊、一九五五年）二一三頁以下、など参照。
(25) 『報徳文献選集』五七頁以下。
(26) 『全集』一九巻二三頁。
(27) 『中庸』第二十六章第一節。
(28) 福住正兄原著・佐々井典比古訳注『訳注富国捷径』（一円融合会刊、一九五八年）一三三頁。

Cultivating the Human Mind in the Direction of Diligence, Economy and Sacrifice

—NINOMIYA Sontoku's theory of moral education—

OONUKI Akira
Member of the Executive Committee, Hotoku Museum

Abstract

The philosophy of Sontoku NINOMIYA can be viewed as a practical system of 'ho-toku' ('the repayment of virtue'). He used the word 'toku' ('virtue') in a broad sense to express the positive use, value, qualities and character that are inherent in all things, including human beings. In his teaching of farmers, Sontoku told them that each individual, without exception, is gifted by grace with a variety of virtues by society and nature. The ethical principle of human conduct should therefore be the cultivation of these virtues as a response to such grace.

The concept of the repayment of virtue is made up of the principles of diligent work, economical consumption, and the allocation of surplus as sacrifice. Diligence is a principle that stimulates the production of useful goods and services for human life by developing material and human beings. Being economical is a principle that serves to control consumption. Sacrifice is a principle that involves devoting savings and surplus to the fair distribution of income and the maximum investment for public purposes to improve the future life of society. Working at the end of the Edo era, Sontoku promoted the development of many rural places, an activity called 'shiho' (meaning the management of developmental projects), by making efforts to educate people and to imbue them with the spirit of diligence, thrift and sacrifice. Sontoku stressed, as a fundamental point, the 'conversion' of people's mental attitude from one that inclined towards laziness, extravagance and exploitation to one that valued diligence, thrift and sacrifice. As the former is much stronger than the latter in the minds of ordinary people, such a conversion was not easy.

Sontoku's ideas about evolution were full of insight, relating as they did to the emergence of mankind and to the developmental process of mental virtue from the animal level to the human level. In human beings, the animal part of the mind has a strong tendency to be lazy, extravagant and exploitative. By contrast, the tendency towards diligence, economy and sacrifice is weak, but it is in accordance with the moral principles established by the ancient sages as a very effective principle for the evolution of the human mind. Leaders in charge of managing developmental projects should earnestly practice ethical principles by following the sages in order to become models for the people. As for educating and leading people towards the mental conversion necessary for the completion of management projects, there are some arts of leadership which are necessary, and these should be work-place and work-practice oriented. The experience of Sontoku shows that such arts of leadership promise the certainty of a successful outcome to projects.